

倫社教育と人間関係

川 口 光 勇

(一) はじめに

卒業論文の研究テーマは「ヤスパースの包括者存在」である。(1) 現在なおこのテーマを基軸に、倫社授業と包括者思想の関連を考察対象とする。

(二) 倫社新聞媒体としての人間関係の展開

昭和39年県立板柳高校全日制課程に勤務をし、「倫理・社会」(以後倫社と略記)の科目を担当する。

学期始め頃の授業形式は、教科書の内容の講義を中心としたために一部の生徒のみの参加に終わり、大多数の生徒にとっては、倫社は死せる科目と化した。

教師と生徒との倫社科目への無関心さや懷疑や教師への不信をどのように取り除くべきか、その方法の模索を始める。

この授業形態の打解のために班編成し、班長を通して他の班への質疑を介した発表中心の授業を展開する。この授業形式の狙いは自分達の所属する班内の「現存在を相互性(Gegenseitigkeit)において保持し、促進する

共同体」(2)の交わりを求めることを主眼とした。この方法がやや軌道に乗った状況において、各学級ごとの壁新聞作成の声が生徒のなかから盛上り、各学級全体の特色を出すために倫社授業内容もそれに繰込むことをおこなう。とくに各HRTの協力を得て、各学級員の「全体の理念の共同体的な実体からの自己養成(Sichervorbidden)」(3)への道を求めることによって学年全体の共通意識が芽生えつつあった。本校には普通科と被服科との意識のずれや考え方の違いがあったので、それを打破するために、いままでの授業形式の土壌の上に立って、教科書や資料集のなかから、五人を選び、それについての授業を行う。この授業形式は、教師と生徒や生徒同士においても、それは人格とかかわりのない伝達方式で「…自己と同一な意識の交わり(Die Kommunikation)」(4)方であって、資料集の模写的な共通の論証することによる自己満足的なものに終始する。ただしこの狙いは普通科と被服科との対立的な差別的な生徒の考えを否定することにある。反面教師と生徒との交わり

り方は、問に対する正確な答えを出してもらっただけの教育の装置に化してしまう。従って生徒個々人の学習の悩みや個人個人の語りかけ等は問題外とし、「対象的なもの以外には何物も対象を絶対的なものとしては存在することはできない」⁽⁵⁾ほど客観化された確実性のみ求めるので、多くの生徒は落ちこぼれる。教師はそれを最少限に留めるために「学習に向って強制するための意図が常に再び支配的」⁽⁶⁾になる。それ故に「学習において魂をもって受け取られるところのものは依然として外見的であって、本来的に理解されないままに留まる」⁽⁷⁾。ただここでは教師と生徒との交わりは、点数とか提出物を媒介したものであって、何人とも代替不可能な人間関係は生れてこない。このような授業を実施して成績向上を行っているという教師自身の自己満足や一時的な失望感におそわれる位が関の山であろう。

生徒の痛みが分かり、教師自身も自分自身の醜や相対的評価のみを気にしていること等を、つまり自分の人生の失敗をさらけ出しつつ、生徒も自分の劣等感や弱さをさらけ出していく中でこそ、「私は実存として現実的になろうと欲するが故に、愛しながらの闘争における交わりを必要とする」⁽⁸⁾方向を自差して個人個人に授業ごとに感想文を書かせる指導を行う。

最初の頃は教師批判や授業に対する疑問等多く見られたが、感想文への批評や反批判を私のほうから求めるう

ちに、生徒自身が、教師とのかかわり方から徐々に自己が自己にかかわりを持つ方に比重が移っていく。ヤスパースは「伝達、聞く事、問と答、確信、闘争によって真なるものを明瞭にする討論等は、認識はそれらにおいて発育する諸形態である」⁽⁹⁾と言うごとく、感想文中心の授業に力点が置かれるうちに生徒の反発や批判や強がりの声や弱者の声が響いてくる。そこにこそ両者の意志の闘争による緊張関係が生れる。感想は一人年間百回で多い生徒は原稿用紙四百枚を越すものも現われる。感想文の内容は、教師不信、劣等感、津軽選挙、親子の離反、出稼ぎ、離農、親の借財苦、農薬公害、二三男の農民の悩み、友情関係、就職苦、嫉妬心、偽善等々自分の身近な体験談である。生徒自身はコア学習形態を形成していく(教師調教による為作造作に反して自然に)。

生徒は一時間毎の倫社授業において一年間感想文を継続して書いたことに対して①大変為になった(49・5%)
②為になった(40・0%)
③無意味である(10・5%)
と言うアンケートの数字の示す通り、自己自身の成長の現実性を主観的な認識の仕方ではあるが、⁽¹⁰⁾形成していったと生徒達が感じとったからだと思う。教師にとっではこの感想文は授業する場合は一つの生きた教材となり、生徒にとっても「世界を認識し世界に対して態度を取る代わりに、私自身に対する私の諸状態や体験に対する態度が認識の源泉 eine Quelle der Erkenntnis」⁽¹¹⁾

たり得ると言う観点にたって、感想文のなかから記事を集める。

生徒達の生活に根ざした思考力や判断力を育て上げるためにも白ら考え、判断したものを全学年のものへ、及び私自身が何んであり、また何が存在するかを経験するためにも「他者の反響(Widerhall des Anderen)」⁽¹²⁾を気づかうことによって生徒同士の交わりの運動の要因を生じ得るからである。

この学校で「倫社新聞」発行50号を発行し続け生徒同士の交わりを求めたが、生徒自身は米とりんごの純農村出身者で占められていて、比較的に経済的には恵まれている。その為か一般的に言って生活のきびしさ(家庭経済の破たんから来る退学者は皆無に等しい)に欠ける感想文で満ちている。(但し台風の影響でリンゴの収穫減少の時だけは例外)。農民の意識は現実とはもあれ、生活実感として政府の厚い保護を受けているし、農協がなんとかしてくれるという意識が働いているからである。感想文の内容の画一化の基底もここに存する。現在の教育制度のなかで、時には経済上の理由から高校退学の身に迫いやられたり、時には生活の充実感を自分の力で味わっている声を聞きながら、その声を直接授業に反映出来る体感教育は、生産労働をしながら自ら学費を賄って教育を受けている夜間定時制高校にこそ息づいているのでは無いかと思ひ定時制高校に転勤を希望し、四六年弘

前中央高校定時制に勤務し現在に至る。

本校の倫社授業で毎時間感想文を書かせる教育が可能であると言う自己確信から、それを行うとしたら、生徒の反発に遭遇し、自分の教育計画の自信過剰と甘さを知らされた。

生徒達は感想文を書きたがらない主な理由は、時間的ゆとりの無いことや自分自身の職場や自分の心を他人に語りたく無い心境とか無関心なこと等である。この状況のなかで、うちのめされた私に希望を与えてくれたのは生徒会活動と生徒会との交流を持つようになったこと(倫社新聞に生徒会活動の情報を流す)と他の一つは、ヤスパースの「しかしながら闘いが止むところに交わりもまた止むし、理性の運動も色あせる」⁽¹³⁾という言葉が私の心を勇気づけた。更に同僚の成田紘治教諭の助言が大きな力として息づく。

倫社新聞発行当時は学習プリントと同一視されたりして、配布と同時に紙屑箱に捨てられたり、落書きの紙にされた。しかしそのうちに高看受験に燃えながらも夜勤のために授業を受けられなかった生徒が倫社新聞を要求するようになったし、その他の授業を長く休んだ生徒達が授業時間における生徒達の発言者の名前と発言内容を知りたいという生徒が徐々に増えて来た。これには授業の形式を講義式の授業から全員に質問する授業への転換による面もある。のように倫社新聞を媒介にして教師

と生徒との人間関係の絆が徐々に形成されていた。とくに山岸善九郎生徒会長の呼びかけで倫社新聞発行百号記念座談会が開催された。

しかし生徒達は授業においては受身であった。その理解の道を探しまわった私は、思い余って生徒の職場を訪問し、経営者と生徒の職場生活の見学と職場内での生徒との会話を倫社新聞に記載する作戦に出た。学校では無気力で無口な生徒達は、職場内では生き生きしており、よく語ってくれた。そこに私の授業の仕方の反省が生れてきた。その一つは生徒の言葉で語ることとか、社内教育の方法等、時により活用し、授業に興味や関心をもたせ生徒を引っぱっていくことにある。それには何よりも生徒を心の中から生徒の賢愚愚鈍に関係なく腹から信じこむことにある⁽¹⁴⁾のだが、そのような教育信仰の世界まで入っていけない私は、せめても生徒から学ぶ一面の姿勢を持ち続けることを意願してのルポ作戦の教育実践である。今までの職場訪問は約二百箇所に及ぶ。そのなかから倫社新聞第六六八号の尾崎組で働いているN君とH君の職場訪問の記事の一部を紹介しよう。

川口「会社員は何人なのか。この職場も管理体制の組織だか」。N君「棟梁↑先立ち↑職人↑見習と呼んでいる。全部で11人おる。棟梁をおれ達は親父と言う」。…この職場勤務時間について記事を取る。川口「おもしろい話って教えてけへ」。N君「大工の神様はおなごの

神様です。柱立てと棟上げのことをタテマエと言って、ご祈禱をする。それを神主がやることもあるし、うちの会社の先立ちもやる。〃ゴヘイ〃これに尻尾のついた草履で、女の髪を巻きつけることもある。これは大工の神様の象徴だはで、それにお酒と鯛(愛でたい)、米2升2合(これはますます繁盛するように)これを備えて拝む」。H君「先生、それはし、幸福が、つまり福の神が逃げないで、留まるように言うことだそうです。それに柱立ての日に雨が降ればよい。それは水神がのりうって火事になりにくいと言うそうです」。N君「神棚や仏壇の上には二階を作らない。…昔は北や西向きは、駄目だったそうです。」。H君「倫社の授業で縁起のことをやったが、この仕事とともに関係あると思って聞いていたもんだ」。N君「この前の先生の職場訪問の記事よかった。×君の奴は、がらにもないところに勤めて頑張っているなあとか。他の職場のことも分かるし、とくに女子の職場のことも気になるしさあ。先生、人生は情熱だ。物を作ることだ。先生職員室や教室におるよりも職場訪問のほうが気晴しになるべき。おれたちもこの方が先生と話つてできるしさ。先生全日制には行くな。先生は全日制向きでないはでさ」。彼等は二人で48坪の家を新築するほどの腕前である。職場訪問の楽しさは52年頃までである。それは生徒達の職場は職人仕立ての場所であるだけ、個性のある生徒が多かった。現在は第三次産業

のサービス業とか一時的アルバイトの仕事場で働く生徒が多い関係上生徒の考え方も同質化され平均化されて来たし、苦勞して職人で自活するという生徒が少なくなってきた関係上、授業も平盤化されつつある故に、授業の方は非常にきびしいものとなり、生徒の自主的活動や活発な発言も少なくなってきた。現在倫社新聞の発行は三二〇〇号に達した。その新聞記事は日々の授業の記録（生徒が交替で記録係と助手係となり、教師や生徒達の授業の取組方批判の雰囲気欄と職場・学校・自分についての課題欄を書く作業）の編集のみで、かつての街頭での市民の声等の集録記事は姿を消す。

（三）倫社指導に関する人間関係の全体構造

一人前の職人に育成させるという教育する職場の少なくなつた生徒を鍛えるのは学校だけになつた昨今において、生徒に幾分でも授業に活を入れるために、ペスタロッチー『隠者の夕暮れ』とか『内村鑑三全集』の中からあるいはその他の本から生徒を激励するような文書を選び出し全員に暗誦させることと、課題に答えた生徒の文章等を織り込んだ授業を行っている。この授業の内容は倫社新聞に記載される。私の発問に対する生徒の発言があやふやであったり誤答であっても、それ故理性は存在するところの何物も省略してはならないし、見落してはならないし、除外してはならない。理性は理性自身

として限界のない公明性である。』⁽¹⁵⁾ という立場に立つて生徒の発言を授業全体の中で生かしていく方法を取る。しかしこれでは交わる者相互は馴れ合いになり相互の覚醒は閉ざされてしまう。この様に授業の迷いに燈明を与えてくれたのは斎藤武雄教授著『ヤスパースの教育哲学』の第6章教育方法論Ⅱ自発的受容性と受容的自発性の論文である。この論文に触発されて倫社授業に活用せんとしたのは、『……まことなることを、自ら進んで受け容れることを自発的受容性と私は言うのである。』⁽¹⁶⁾ また、『……理性の自発的受容性は、教育方法としての『傾聴』の原理を生む（帰結する）』⁽¹⁷⁾。この原理に立つて生徒が傾聴に価する教材を自ら工夫して生徒に与えることにある。その試みとして私は東井義雄氏の著書の中から死刑囚の文章と中学校の道徳教育の副教材より平和の問題を取上げ、更にレバノンの孤児救済のキャンペーン⁽¹⁸⁾を倫社新聞に記載したところ、定時制は214年全員、全日制3学級全員募金に参加する。

「……この問うことは、受容と共にあり、受容を前提としている。それは受容的自発性こそ『創造』の原理である。』⁽¹⁹⁾ といわれることく、生徒に問いを起こさせるための課題の研究を深めさせることによって両者の関係を授業の中で弁証法的に展開するところに教師と生徒との新たな人間関係の構造が生まれる可能性が生じつつある。

註

- (1) 卒業論文の指導教官は斎藤武雄教授である。(昭和29年度)。原典資料は Karl Jaspers, *Von der Wahrheit* (以下本書をV, d, Wと略記する)
- (2) V, d, W, S. 376 (3) V, d, W, ebd.。普通科担任木村信弘教諭の助言指導が大きい力となる。(4) ebd.
- (5) V, d, W, S. 734 (6) V, d, W, S. 365 (7) V, d, W, S. 366 (8) V, d, W, S. 373 (9) V, d, W, S. 315 (10) 『月刊高校教育』拙稿「覚醒の教育」四三頁以下参照。学事出版第七巻・第五号 (11) V, d, W, S. 369 (12) V, d, W, S. 374 (13) V, d, W, S. 984 (14) 若林繁著「教育は死なず」参照 労働旬報社 (15) Jaspers, *Vernunft und Widervernunft in unserer Zeit*, S. 34 (16) 斎藤武雄著『ヤスパースの教育哲学』創文社発行) 参照されたし。
- (16) 前掲書124頁 (17) 前掲書125頁 (18) 矢内原忠雄著『聖書講義Ⅶ』イザヤ書56頁・岩波書店版等関連資料転載I (19) 斎藤武雄教授の前掲書125～128頁参照。詳細は紙数の関係上割愛す。

付記

「倫社新聞」発行に関しては、梶哲夫・斎藤弘・中村新吉・藤田慶造先生方の助言・指導を受く、深く謝する次第である。
(弘前中央高等学校校定時制教諭)